社会科教育

奈良県小学校教科等研究会
社会科部会
第77号

これからの社会科教育

奈良県小学校教科等研究会社会科部会
部会長　沢田政宏

沢田社会科部会長

一　はじめに

この原稿を書いているのは、七月初旬、ＦＩＦＡワールドカップロシア大会開催の真っ只中です。ワールドカップを切り口に、新学習指導要領を考えてみることにしました。

日本は、ベスト十六に残りながら、ベルギーに惜しくも二対三で逆転負けをしました。

しかし、この日本対ベルギーの試合の中に、新学習指導要領の特色が含まれているのではないかと考えています。

二　主体的・対話的で深い学び

新学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びの実現を目指して、問題解決的な学習の充実を図ることを求めています。

サッカーで例えますと、ベルギーチームを知りたい、勝ちたいという気持ちです。その為には、ベルギーチームに誰がいるのか、どんな特徴を持った人がいるのか、シュートは、誰が上手か、守っているときに弱点はないのかなど、様々に自ら考えます。これが『主体的』という意味だと考えます。そして、ビデオを見て戦術的、戦略的には、どんな特徴を持っているのか、弱点はないかなど様々に自分自身で分析します。また、監督を始め、チームのみんなと意見を出し合い、今度の試合は、誰が誰をマークするのか、攻めるとき、どこを重点的に攻めるといいのかという作戦を立てます。これが、『対話的』です。さらに、実際に試合になり、戦略戦術が正しかったか、修正点は何か、アクシデント時の対応などが『深い学び』になります。

そもそも社会科は、〝social studies〟の日本語訳であり、〝学習の主体である子どもが自ら問いを見出し、共に学び合う仲間と対話するなどの社会的な関係を通して探求し合う〟教科です。この社会科本来の学び、即ち子どもたちによる協働の問題解決をすることが、「主体的・対話的な学び」には必要不可欠です。

実際の授業においては、これまでと同様に、子ども一人ひとりが学習の対象に興味・関心や問題意識をもつこと、その上で自らの問題を見出し、予想や学習計画、追究の方法などを考え、吟味し合うなどの学習を工夫して、問題解決の見通しをもつことが大切です。

また、「深い学び」の実現を目指し、問題追究の過程で、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係に着目し、捉えた事象を比較・分類し特色を考えたり、相互の関連、意味などを考えたりするなど、『社会的事象の見方・考え方を働かせて問題を追究・解決する学習』に力を入れる必要があります。

加えて、自らの学びを振り返り、学んだことの意味を問い直したり新たな問いを見出したりして、学習したことを実社会・実生活に生かすようにすることが大切です。

これまで述べてきたように、主体的・対話的で深い学びの趣旨は、これまで奈良県小学校教科等研究会社会科部会が大事にしてきたものと同じです。これからも今まで本研究会が培ってきたものを大切にしながら、教育活動を展開していきたいと考えています。但し、学習内容については、変更点があるので注意をする必要があります。

三　学習内容の主な変更点

内容については、中学校との関連を考慮して、

(一)地理的環境と人々の生活
(二)歴史と人々の生活
(三)現代社会の仕組みや働きと人々の生活

という枠組みで、内容を整理しています。

そして、これまで第三学年及び第四学年の内容として示されていた中学年の内容が第三学年の内容と第四学年の内容とに分けられました。

さらに、政治の働きへの関心を高めることを重視して、第六学年の学習の順序を(一)我が国の政治の働き、(二)我が国の歴史上の主な事象の順とし、これまで歴史学習、政治学習だった順序を入れ替えています。

また、各学年で新たに加わった内容及び独立して扱うようになった内容があるので確認しておく必要があります。

四　おわりに

第六十五回奈良県小学校社会科研究大会を御所市立秋津小学校において開催いたします。会場校の皆さまには、「自他を大切にし、主体的に取り組む子の育成」という研究テーマに迫る熱心なお取組をいただいていることと多くのご協力に深く感謝申し上げます。本研究大会参加の皆さまには、公開いただく授業から秋津小学校でのこれまでの研究成果を学び取るとともに各分科会の協議で活発にご意見をいただき、今大会が実り多きものとなることを願っております。

奈良県の社会科教育がより一層発展し、子どもたちの学びがさらに豊かなものになりますよう今後とも皆さまのご支援・ご協力をお願い申し上げます。

奈良県小学校教科等研究会社会科部会
平成29年度冬季研究大会
学年別分科会

平成30年2月16日　奈良県立教育研究所

第3学年部会

「昔の道具と生活の移り変わり」
―実際に道具を使った体験をもとに考える授業実践―

王寺町立王寺南小学校
教諭　近藤　大輔

【本実践における提案】

地域における人の営みに学ぶ教材として本単元を取り上げた。道具の移り変わりから、人々の願いが存在することを理解し、人々の生活の移り変わりについて考えることに繋げた。そして、より良い生活の実現を願って、二十年後の生活にあったらいいと思う道具について考えさせる活動を通して、「より良い社会の形成に参画する力」を育てようとした。

実践では、体験活動を重視した。火おこし体験では、一度失敗をさせた後、近所に住むお年寄りの方をゲストティーチャーに招いて再度体験活動を行った。洗たく板体験では、進化したプラスチック製のものも用意し、児童に比べさせる活動も行った。その他、七輪の体験活動も行った。その後、昔の道具とその用途について調べ学習を行い、調べたことをもとに絵年表作りを行った。この絵年表には、「なにが」、「いつごろから使われているか」、「使い方」、「よさ」を書きこむようにした。この活動を通して、道具の進化には、常に人々の願いが込められていることを理解させることができた。

ねり合いでは、「どうして今も昔の道具が売られているのだろう」とテーマを設定した。偏った意見も多かったが、自分の考えを言える楽しい時間になった。ねり合いの中で、「新しいものがすべてではない」という点に気づかせる機会となった。

このような体験、制作、ねり合いの活動を通して得た知識や考えをもとに、「ひろげる」段階では「未来にあったらいいな」という道具を考え、発表する機会を作った。

評価については、指導と評価の一体化を図るため、学習後に振り返りを記録させるようにした。また、体験的な学びや調べ学習を取り入れたことで、児童が学びを自分ごととし、いきいきと学習に取り組む環境を設定することができたと考える。

【研究討議】

・知識の構造図の中心概念の獲得は？
→体験や調べ学習の、積み重ねでせまっていった。振り返りを見て、獲得できたかを判断していた。
・絵年表から生活の移り変わりを引き出す仕かけは？
→どうして最新のものに変わっていったのか、という問いかけから、「こうなってほしい」という願いに気づかせた。
・他の道具への興味を引き出す仕かけは？
→ゲストティーチャーは、子ども達からの声で呼ぶ展開になったので、ゲストティーチャーによって興味を与えてもらう展開でも良かったのではないか。
・評価への活用について、ルーブリックは？
→明確に観点分けはしていなかったが、「古い道具のよさにも気づけていたらA」、「やったことの感想のみの場合はB」とした。

【指導助言】

御所市立秋津小学校
教頭　福井　忍　先生

・本単元は、地域性によって非常に左右される単元である。
・本実践は、多種多様な学習活動があり、児童の学びにとって良い活動が多い。初めての歴史学習で、人の営みが常にあったという発見ができる。6年生の歴史学習にも繋がっていくと考える。また、地域の愛着、誇りにも繋がる。・時間・昔の人の願いは分からない→想像することで迫るしかない。→5W1Hで言葉を投げかけていくことが大事。
・体験活動をするうえで、失敗体験は大事。
ゲストティーチャーから学ぶができているのも良い。
・物を見せて、使い方を想像させることは大事。
・ねり合いは「A or B」が考えをまとめやすい。
「今と昔の生活では，どちらが便利だろう？→どちらが幸せだろう？」

（郡山南小学校　木之下　昇平）

分科会での提案の様子

第4学年部会

「県内の特色ある地域の様子」
―日本一の柿のまち五條市―

大和郡山市立郡山西小学校
教諭　島　俊彦

【本実践における提案】

奈良県小社研の研究主題にある「よりよい社会の形成に参画する力を育てる」とは「社会に対して将来、実践できる具体的な活動を考える力」であると捉え、「学習問題を解決していく過程で新たに見つけた課題を「ねり合い」により解決しようとすることが、よりよい社会の形成に参画する力を育てることにつながる」という研究仮説を立てた。

本実践は、「県内の特色ある地域の様子」についての学習を地域の自然環境・資源を活かし、様々な立場の人が協力して「日本一の柿のまち」として地域や産業の発展に努めている五條市を教材とした。校区と遠いがマルチメディア教材で地域の特色をつかみインタビュー映像などを利用して人々の営みを捉えられるようにした。

ねり合いでは問いを「三十年後も五條市は日本一の柿のまちを守り続けられるだろうか」と設定した。児童は守り続けられる・守り続けられないという二つの立場を明確にしてねり合う活動を行った。「しらべる」段階で得た知識をもとに話し合いができると考えたからだ。

また、児童の思考をゆさぶる資料もいくつか提示し、五條市の特色や人々の生活の様子を、多面的かつ多角的に考えることができるようにした。

【研究討議】

・見学やゲストティーチャーがなくても子どもたちが五條市の柿づくりを身近に捉えるために工夫したことは何か。
→まず誰を呼ぶか考え、その5人の立場をフラットに見せるため全員をインタビューした。それにより色々な立場の方の思いを知ることができた。地図帳・マルチメディア教材なども有効な手段であった。
・自校区と比べることや自校区を振り返ることがあり、子どもたちは多角的に物事を見たり、自分のまちに愛着を持ったりすることができてよかった。

学習の様子

・歴史がある中で柿農家をされた方もいると思うので五條市民や子どもの思いを知ることができればよかったと思う。
・ねり合いにおいて自分の市と比較する意見が出る工夫、また具体的な意見を書くための指示の仕方などが課題となった。

【指導助言】
大和郡山市立筒井小学校
教頭　木村　栄一先生
・遠い地域のことであってもインタビュー映像などで身近に感じさせる工夫がありよかった。しかし、電話やＦＡＸなどで関わりを双方向にする必要もある。また、クイズ形式や食べ物の紹介、自分たちとの関わりのある物に繋げると身近に感じやすい。
・新学習指導要領では中心概念が分かりやすくなっているのでそれに沿って学習を進めてよい。
・人々の苦労には必ずそれに対する工夫がある。その工夫に目を向けられるようにする。
・一時間ごとに目標があってよかった。毎時間のめあて・ふり返りは授業の中で大切にしていきたい。板書も丁寧でよかった。
・ねり合いでは言語環境、つまり温かいクラスづくりが大事。また児童の思考をゆさぶるときは言葉だけでなく表やグラフ・図を用いると社会の見方やそれをもとに考える力が身につくと思う。
・学校で組織的に学習の繋がりを組み立てることが大切。
（斑鳩東小学校　大田　沙織）

第5学年部会

「情報をつくり、伝える」
―情報を伝える人々を中心とした学習を通して―

橿原市立晩成小学校
教諭　嶋野　倫代

【本実践における提案】
○研究の視点
①教材・学習計画
体験学習や聞き取り学習
新聞記事の内容表現の仕方や工夫、努力や思い願いを考える。
新聞づくり
②ねり合い
知識の獲得→ねり合う活動
③評価
授業の振り返り
ルーブリック評価
○研究の実際
①みつめる
自分たちの実態・新聞は情報源として利用されないが、信頼度は高い。
②調べる
新聞に載っている情報を知る。構成の仕方、新聞社による違い
国語の時間に新聞づくり　ＩＣＴサポーターの協力のもとインターネットで調べる。
動画「新聞ができるまで」日経　調べた内容は附箋に書いてまとめる。
毎日新聞奈良支局・編集局長をゲストティーチャーに招き、新聞によって伝える内容が違うのかＡとＢ　ＡとＣ　ＡとＡ
新聞による影響力から
名前を載せる難しさ、人権を守るため訂正記事を載せる。責任を持っている。誤報について
③ふかめる
⑴一人で考える。
⑵グループで話し合い、出た意見をグループ化する。
⑶全体で話し合い「速さ」「正確さ」「興味」でグルーピング
④ひろげる
○成果と課題
①大切にしてきたこと
・体験活動　ゲストティーチャーの話。新聞づくり
ＩＣＴによる調べ学習
ＩＣＴサポーターの活用
・ねり合い
考えの視点のずれ、書かせ方の工夫
・評価　授業の振り返り。ルーブリック評価判断基準の設定。
書き方の工夫
②仮説の検証
③新聞の特徴や生活への影響
④ねり合い後の児童の考えの変容

【研究討議】
①「授業の盛り上がりがあり、狙いがはまった。」
・取材記事編集は分かるが印刷配達まで学習した意図とは？
→教科書に印刷配達まであったことと、児童からの調べたいという声があった。（動画での印象や配達される新聞のイメージが児童にあったのか）
・新聞に対する評価は？
→保護者からの感想や先生からの口頭での評価。
②新聞を取り上げた理由は？
→毎日新聞が先に決まったから身近になさ過ぎたので少しでもと思って。
・ふかめるところのグルーピング・新聞社として決して忘れてはいけないモットー・新聞社としての特色は、どのような基準で分けたのか？
→絶対いるもの「速さ」「正確さ」「人権を守る」「わかりやすさ」
特色「ほかの新聞社と違う見方」
・ルーブリック評価の仕方について
→学びのプロセスが表現できる振り返りを心掛けた。
③「新聞づくりをさせたことがよかった。」
・新聞は信頼できるものなのか？
（戦時中の情報操作などを取り上げてもよかったのでは）
→新聞の影響力のところでそれを取り上げ、そこから情報を受け取る側の姿勢につなげる。
・ねり合いの前時の様子は？
→新聞の影響力・誤報・誤字については、自分で新聞を作る際に痛感していた。事実未確認については、早く出したい一心だったのかという意見が出た。

【指導助言】
大和郡山市立昭和小学校
教頭　山口　弘一先生
・４観点から３観点に変わったことを踏まえて、新学習指導要領で生きていく子供たちがどのような社会で生きていくのだろうと考え、「社会が激動する」「一つのことがいろんなことに影響する」「変化が速い」「既存の答えが存在しないような課題」「課題が多岐にわたる」「次々に課題が出てくる」「一部の人ではなく一人一人が取り組んでいかないといけない課題が出てくる」など、難しい課題に挑戦していく資質能力が求められる。
・学校に求められるもの
基礎となる知識理解・思考判断表現。様々な人と協力して課題解決していく力、知的な力、情意的な力
・社会科学習で求められるもの
知識をつないでいく学習→知識を構造化していく。それを中心となる概念で説明可能にしていく。
概念化・構造がメリハリの利いたものにする。→児童が出したばらばらのモットーをグルーピングしていくことで概念化できたのではないか。情報を発信する側の学習は十分できたが情報を受け取る側の学習がもう少しあってもよかったのではないか。
（平野小学校　中尾　創太）

分科会での提案の様子

第6学年部会

「新しい日本へのあゆみ」

広陵町立広陵東小学校
教諭　奥田　実

【本実践における提案】

実践にあたり、東京オリンピックに焦点を当て、戦後わずか十九年でオリンピックを開催するまでに成長した背景を探り、人々の苦労や努力に迫った。さらに、二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックを通して、日本の課題や未来に向けて自分たちにできることを考えられるようにした。

〔みつめる〕では、二つの写真を比較して人々の様子から、子どもたちと学習問題を作った。

〔しらべる〕では、祖父母や当時のオリンピック選手へのインタビューから、人の思いや願いを知る活動を取り入れた。

〔ふかめる〕では、「東京オリンピックを開くことができたのは○○だ」という形でねり合いを行った。その際、人の努力にスポットを当てて学習を進めた。

〔ひろげる〕では、オリンピックから日本や世界の課題を解決するために、どんな考えをもっているのか思考させ、キャッチコピーをつくる活動を行った。

【研究協議より】

・今の日本の課題を子どもたちがどれだけ認識していたのか。→少子高齢化という意見が多かった。それをオリンピックと関連づけるのが難しい。

・オリンピックが開催できたのは、いろいろな事象が絡み合って、十九年間の間に日本が復興したからである。いくつかの事象をつなげて考えられているということがとても大事。子どもたちが関連づけることができていることを評価していくほうがよかった。

・「東京オリンピック開催で世界に伝えることができたのは何か」という課題で、子どもたちはとてもわかりやすかったと思う。

【指導助言】

明日香村立明日香小学校
教頭　福辻　智実先生

人の営みに学ぶことが難しくなってきている。地域の人を発掘し、人材バンクを積み重ねることで今後の実践に活かされ、みんなが聞き取りしていくことができる。

ねり合いを「東京オリンピックを開くことができたのは○○だ」にしてしまうと児童はキーワードに夢中になり、「世界に伝えることができたのは何だろう」という課題に結びつけにくい。その後のキャッチフレーズも難しかったと思う。前大会では、日本はこんなことを世界に伝えることができたのだということをしっかり理解できていれば、では二〇二〇年の東京オリンピックではどうなのだろうとキャッチフレーズを考えることができたと思う。関連性も大事だが、多面的に考えるべきだったのでは。キーワードを組み合わせて、意見を総合的に考えることで、テーマに迫っていけたと思う。

（飛鳥小学校　前田　明日香）

学習の様子

世界遺産を教える

冬期研究大会の中で「世界遺産で伝えたい」という内容でキャスター・アナウンサーとして活躍しておられる久保美智代さんに講演をして頂きました。久保さんは世界遺産検定を受けられ四〇〇カ所を超える世界遺産を訪れ、ブログなどでも紹介されています。奈良県内の高校で「世界遺産教室」も開かれていました。

世界を知るための窓

二〇一八年に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」などが世界遺産に加わり、世界遺産は現在一〇九二件となりました。

久保さんは「世界遺産は、歴史や文化を教えてくれる」とおっしゃっています。

世界遺産創設のきっかけ
水没を逃れたアブ・シンベル神殿

（紀元前一三〇〇年ごろに建設された高さ三十三メートル、幅三十八メートル、奥行き六十三メートル）千九百六十年代にアスワン・ハイ・ダムの建設で水没の危機に直面しました。ユネスコが遺跡の救済を呼びかけ、世界六〇か国の援助を受け千個以上のブロックに切り分けられ四年をかけて安全な場所へ移築されました。その後「人類共通の遺産を守ろうと世界遺産条約の採択へとつながりました。

アメリカとカナダの国境をまたぐ
ウォータートングレイシャー国際平和自然公園

二国の国境を自由に行き来できるツインパーク。ロッキー山脈・氷河湖の景観やグリスリーなどの野生生物を国境で分ける必要はない両国で一緒に自然を守っていこうというメッセージが伝わってきます。アメリカの船着場には世界の言葉で平和が書かれた看板があるそうです。

「売らない・貸さない・壊さない」
白川郷住民憲章を守り続けて

昭和四十年代からこの住民憲章を基盤に、集落の自然環境や住民の絆や風習文化など保存してきた取り組みが、重要伝統的建造物群保存地区の選定や世界遺産の登録へと繋がってきました。住民の集落への思いを知ることと同時に五十年経った現在の集落の課題にも目を向けることができます。住む人がいない「空家問題」、移住者の高齢化と継承者がいない「継承問題」など深刻な課題が出てきています。これは白川郷集落だけでなく全国各地の共通の課題となっています。これらの課題にどのように取り組んでいるのかを学習することもできます。

軍艦島（端島）では

なぜ島に人が住み、そして住まなくなったのかという問いから→石炭を採るために地下深くまで掘り進めた。→掘って出た土で埋め立てた。→家族が住むようになり町ができた。→石油の利用や安い外国の石炭が入ってくるようになった。→島の景気が悪くなる。→人が減っていく。軍艦島の歴史から、当時の社会の様子も学ぶことができます。

守るのも人間　壊すのも人間

世界遺産から抹消されたものもあります。保護区の九十パーセントを開発したケース。パルミラなど戦争などで破壊されている危機遺産、原爆ドームなど負の遺産など、歴史やこれからの保護について考える事でたくさんのことが見えてきます。

最後にユネスコ憲章から

「戦争は人の心の中に生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」

世界遺産を通して様々な国の文化・自然に興味をもちながら歴史を学ぶこと、そしてそこに暮らす人々に出会い　知れば知るほどその国の人と戦争しようと思わなくなる。平和の砦がより高く分厚く頑丈になります。

たくさんの世界遺産を訪れその国の文化や人々と触れ合う中で久保さんが感じてこられたことを教えていただけました。

奈良県には世界遺産をはじめ歴史的に大切に守られているものがたくさんあります。奈良市では世界遺産学習に取り組まれています。自分たちの校区や地域にも昔から残っている建物・行事などがあると思います。そこに目と向け、自分たちの地域の人々の思いや地域のこれからを考えることができるのではないでしょうか。